アダンのある暮らし

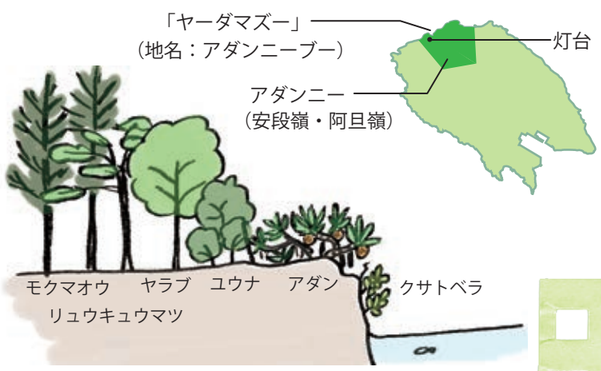
池間島の周囲には、いたるところにアダンが生えています。池間では、アダンは生活に欠かせない非常に重要な植物でした。そのため、他の地域では見られない「石アダン」と「水アダン」という区分があり、その用途も異なっています。

防風防潮林・魚付き林

八重山の昔話に、神様が島を緑で覆うために木々を集め、アダンには「海岸が大波に削られないように島を守りなさい。そのかわり牛や馬に食われないように棘をつけてやろう」と言ったという話があります。海風が強く、栄養分も少ない島の周囲の岩礁や砂地には、アダンが茂っています。そして、このアダンがあるおかげでその背後にヤラブやユウナなどが育つことができ、松やモクマオウなどを植樹することができました。

池間島の北西部、灯台の左右に安段嶺と阿旦嶺（ともにアダンニー）という地名が残っています。このあたり一帯は、王府時代にアダンの植林が行われ、それが維持されてきたものと言われています。アダン林は防風防潮林としてだけでなく、魚付き林としても重要な意味をもっていました。この海は「豊かな漁場として零細な海人（インシャ）たちは、ヤーダマズー（先祖ゆずりの貴重な畑）として今も活用している」（平良 2002：51 頁）。実際この辺りはエラブウナギの産卵地として貴重な海域となっています。

さらに、アダン林は、天然記念物となっている貴重なカニ類（ヤシガニ、オカヤドカリなど）の生息する重要な生態系であり、陸と海の栄養循環を繋ぐ重要な機能を担っていると考えられています。



気根

アダンでもっともよく利用されたのがこの気根（アダナス）を割いて作られる縄です。水に強く良質な繊維であるため、船のロープや生活用具にも利用されてきました。

根の先に笠をかぶり、地面に到達していないものを選んで刈り取る

刈り取ったらすぐに皮をむき

鎌や包丁をつかって薄く割く。

船のロープ

サバニやカツオ船を舫うロープはすべてアダナスでできていました。良質なアダナスは秋に収穫され、冬場は各家庭で縄をなう姿がみられたそうです。「春先になると船主が買い集めた素縄を各カツオ船組合では、夏の漁期にそなえて本船を係留するロープ作りが水浜広場で行われた」（平良 2002：71 頁）。春の風物詩のひとつでした。

日光にあて乾燥させる。日陰干ししたり、雨に濡らすと繊維が弱くなる。

乾燥させたアダナスを潮水でしめらせ、手で細かく割いていく。

細い繊維になったら、両手をこすり合わせるようにして縄をなう。

フダミ

大潮の時、池間の人々は一斉に干瀬に潮干狩りに出かけます。サンゴのゴツゴツした地面を歩く（走る？）時に活躍したのが、このフダミという草履です。塩水に強く、繊維も頑丈なアダナスでなければ簡単に壊れてしまいます。前泊勤さんがその作り方を教えてくれました→

なわれた縄。

なった縄を使い、フダミ（ぞうり）やアンディ（網袋）などを編んでいく。

完成したフダミ。

アンディ（網袋）、アウダ（もっこ）

畑や海の収穫物を入れるのに活躍したのが、アンディと呼ばれるアダナスで編まれた網袋です。サザエやシャコガイを入れても破れず、イモを入れて海で土を洗ったという話も聞きます。大きな荷物を運搬する時に使われたアウダ（もっこ）もまた、アダナスの縄で作られていました。さまざまな生活用具に利用されるアダナスを確保するため、秋になると大人も子供もアダン林に入ったそうです。

幹

建材

建材の乏しい池間では、アダンは重要な建築資材として利用されてきました。石アダンは堅くまっすぐ伸びるので、主に柱に使用されていました（他の地域でアダンを柱に使ったという話はあまり聞きません）。春になると、家の柱から新芽が出るという不思議な光景が見られたそうです（平良 2002：70 頁）。
また、8 月の 15 夜には、少年たちはお気に入りの樹木の上に小屋を作って遊んでいました。この時もアダン木が良く利用されていたそうです。

アダンの木でブランコ（1960 年代）

焚き物

柔らかくグネグネと曲がっている水アダンは、乾燥させて薪として利用されていました。当時は松やモクマオウ、ヤラブギ（テリハボク）なども使われていましたが、量がすくなく、多くの家では鰹節工場の薪木の皮やサトウキビの皮など、燃えるものは何でも使っていました。潮に強く、砂地や岩礁でも育ち、成長の早いアダンは池間の貴重な燃料資源でした。

葉

焚き物

石油コンロやガスが普及するまで、料理はカマドで作られていました。昔から木が少ない池間では、アダン葉は最も重要な焚き物で、1960 年代までお母さんたちとそれを手伝う子供たちがアダン葉の束を頭に載せて運んでいる姿が多くみられました。

草履

アダン葉には鋭い棘がありますが、これを取り除いてアダン葉草履を作っていました。戦後は 5 銭で売買され、人気商品だったそうです。

玩具

子供たちは、アダン葉で風車などのおもちゃをつくって遊んでいました。

非常食

アダンの新芽は野菜としてよく食べられていました。

私たちが子どもの頃は、４・５年生の頃からお母さんたちの手伝いで薪採り。大変でしたよ。薪に不自由だったからね。アダン葉とか松葉とか、木の枝の枯れたものも拾ってきていた。アダンニーの方には木がたくさんあったので、向こうの方まで行って採っていました。
日曜日に採りにいくけど、学校から帰ってきて暇なときには、お昼からも採りに行ったこともありますよ。友達同士でよく行っていました。おやつ代わりにして木の実を食べながらね（笑）

濱元照子さん（89 歳）

果実

アダンの木に登って実をとる少女（1960 年代）

アダン葉拾いの手伝い中おやつはこれ！（1960 年代）

ツガキの乾燥したものは、カツオなどを燻しながら乾燥させる燃料にも使われていました。今でいう燻製のチップです。

アダンの実はオカガニやヤドカリ、ヤシガニなどの大好物ですが、人間だってよく食べていました。昔の子供たちのとても重要なおやつだったのです。
アダンの実が熟すと、実がポロポロと外れてきます。1 つの実には 60 ～ 120 個の分果が集まっており、この分果を池間では「ツガキ」と呼んでいます。子供たちは、これをしゃぶって甘みを楽しんだそうです。さらにツガキを取り外した中心部を「パス」といって、これも良く食べられていました。生でも甘く、煮て食べる人もいたそうです。

アダンは熟したものをとってきてさ、子ども達はどこのアダンがおいしいとか、どこのものがおいしくないかよくわかっておったよ。これしかおやつはないからね。一口ずつ食べ比べしたりして（笑）熟してからが食べられる。あんまり熟したら中もだめさね。実が下に落ちるさ。
山にいってアダン葉を取りに行くさね、枯れたものを。これで芋も炊いて食べて、薪にして炊いておったさ。

前泊勤さん（88 歳）

アダンがおいしいさぁね。あれがご飯だ、あれを採って食べて、だからお昼も食べたことがなかったよ。薪を採りにいって。おいしいアダンがあるさぁよ、あれをむいて食べているわけさ。そして、中のものはパスと言って、またおいしいさぁね。

山城美枝さん（76 歳）

制作：NPO 法人いけま福祉支援センター　三輪大介・坂田智子
参考文献：『海人の島』平良新弘 ,2002 年発行